益田市匹見町埋蔵文化財調査報告第47集

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書ⅩⅦ

２００５年３月

島根県益田市教育委員会

益田市匹見町埋蔵文化財調査報告第47集

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書ⅩⅦ

２００５年３月

島根県益田市教育委員会

序

本書は、平成16年度における国庫補助事業として実施した『町内遺跡詳細分布調査報告書』であります。

当町の匹見には歴史の痕跡、とくに原始・古代遺跡が顕著な地区であることはご承知のことと思います。これは狩猟・採集を基調とした特に縄文時代、つまり自然の恵みを摂生した縄文人にとって、本地区は格好のエリアであったことを意味し、その誘因は、なんといっても食料供給源となる豊富な落葉広葉樹が拡がっていたからに他ならないといえるでしょう。

本年度におきましては本報告のとおり、諸事業に先立って５地点を調査しておりますが、うち３地点では、その痕跡を認めることはできなかったものの、広戸・平内田の２地点におきましては、有望な遺跡であることが判明いたしました。とくに前者の広戸地点では、縄文後期初めから前葉（今から4,000年から3,700年前）の遺物が多量に出土しており、記録保存等の文化財保護対策を講ずる必要があろうと考えている次第であります。

末尾でありますが、寒暑の中発掘作業の皆様方、そして土地所有者並びに関係機関の担当者の方がたにお礼を申し上げるとともに、またご指導いただいた島根大学法文学部の山田康弘助教授には厚く感謝の意を表し、以上序文といたします。

平成17年３月10日

益田市教育委員会

教育長　陶山　勝

例　言

1．本書は、平成16年度国庫補助事業として、匹見町教育委員会（平成16年11月1日から益田市教育委員会）が行った町内遺跡詳細分布調査の報告書である。

2．調査は、島根県教育委員会文化財課の指導と協力を得て、次のような体制で実施した。

調査主体	匹見町教育委員会（平成16年11月1日から益田市教育委員会）	
調査員	匹見町文化財保護専門員	
	（益田市教育委員会 文化振興課 埋蔵文化財調査専門員）	
		渡辺友千代
調査員	匹見町教育委員会主任主事	
	（益田市教育委員会 文化振興課 主任主事）	山本浩之
調査補助員	匹見町埋蔵文化財調査室	
	（益田市埋蔵文化財匹見調査室）	栗田美文
調査協力員	匹見町埋蔵文化財調査室	
	（益田市埋蔵文化財匹見調査室）	大賀幸恵
		大谷真弓
調査指導員	島根県教育委員会文化財課職員	
	島根大学法文学部助教授	山田康弘
事務局		
	匹見町教育委員会教育長	松本隆敏
	（平成16年10月31日まで）	
	益田市教育委員会教育長	陶山勝
	（平成16年11月 1日から）	
	匹見町教育委員会次長	渡辺健一
	（平成16年10月31日まで）	
	益田市教育委員会 文化振興課長	安達正美
	（平成１６年11月 1日から）	
	益田市教育委員会 文化振興課 文化財係長	木原光
	益田市教育委員会 文化振興課 主任主事	山本浩之
発掘作業員	宮市勇　斎藤幸夫　藤井一美　森伊佐男	
	田中莫　上原弓子	
遺物整理員	渡辺聡　大賀幸恵　籾田睦美　藤井美樹	
	大谷真弓　上原弓子	

3．調査に際しては、土地所有者をはじめとして、地元の方々に終始多大なご協力をいただくとともに、また益田土木建築事務所、益田農林振興センター、匹見支所建設課の各担当者にも多大なご協力をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

4．本発掘調査では遺跡としての有無にはかかわらず、総て調査地は○○地点という呼称方法をとった。なお、本調査に関する資料等は益田市埋蔵文化財匹見調査室で保管している。

5．編集にあたっては、前掲の調査員・調査協力員らの協力を得て、執筆・編集は渡辺・栗田が行った。

目　次

第１章　発掘調査に至る経緯と経過 ---------- （渡　辺） ---------- 1
第１節　発掘調査の経緯 ---------- 1
第２節　発掘調査の経過 ---------- 1

第２章　広戸地点 ---------- （渡　辺） ---------- 2
第１節　地区の環境 ---------- 2
１．立地 ---------- 2
２．周辺の遺跡 ---------- 3
第２節　調査の概要 ---------- 3
１．はじめに ---------- 3
２．調査区の設定 ---------- 4
３．層序と遺物包含層 ---------- 4

第３章　平内田地点 ---------- （栗　田） ---------- 11
第１節　地区の環境 ---------- 11
１．立地 ---------- 11
２．周辺の遺跡 ---------- 11
第２節　調査の概要 ---------- 11
１．はじめに ---------- 11
２．調査区の設定 ---------- 11
３．層序と遺物包含層 ---------- 12

第４章　そのほかの調査地点 ---------- （渡　辺） ---------- 15
第１節　石田地点 ---------- 15
第２節　久保田地点 ---------- 15
第３節　河森田地点 ---------- 16

挿図・図表目次

第１図　調査地点位置図 ---- 1
第２図　地点位置と周辺の遺跡図 ---- 2
第３図　調査区配置図 ---- 3
第４図　土層図 ---- 4
第５図　実測遺物（１） ---- 5
第６図　実測遺物（２） ---- 6
第７図　実測遺物（３） ---- 7
第８図　実測遺物（４） ---- 9
第９図　調査地点と周辺の遺跡図 ---- 11
第10図　調査区配置図 ---- 12
第11図　土層図 ---- 13
第12図　実測遺物 ---- 14
第13図　地点位置図（石田地点） ---- 15
第14図　土層図（石田地点） ---- 15
第15図　地点位置図（久保田地点） ---- 15
第16図　地点位置図（河森田地点） ---- 16
第17図　土層図（河森田地点） ---- 16

第１表　出土遺物集計表 ---- 5

図 版 目 次

図版1　広戸地点
1．北東側からみた調査地点近景　　2．A調査区の堆積状況（南・東壁）
3．B調査区の堆積状況（西壁）　　4．縄文土器片の出土状況
5．黒耀石片の出土状況　　6．南からみた各調査区の完掘状況

図版2　広戸地点
1．縄文土器の出土状況　　2．出土土器（1）

図版3　広戸地点
1．出土土器（2）　　2．出土石器

図版4　平内田地点
1．南からみた調査地点遠景　　2．南からみた調査地点近景
3．A調査区の堆積状況（南壁）　　4．B調査区の堆積状況（南壁）
5．C調査区の堆積状況（南壁）　　6．打製石斧の出状況

図版5　平内田地点
1．弥生土器の出土状況　　2．土師器の出土状況
3．出土遺物

図版6　石田・久保田地点
1．県道からみた石田地点　　2．A調査区の堆積状況（北壁）
3．B調査区の堆積状況（北壁）　　4．C調査区の堆積状況（西壁）
5．南側からみた久保田地点遠景　　6．A調査区の堆積状況（北壁）

図版7　久保田・河森田地点
1．B調査区の堆積状況（南・西壁）　　2．C調査区の堆積状況（北壁）
3．南東側からみた河森田地点近景　　4．発掘風景
5．東からみたA調査区の完掘状況　　6．東からみたB調査区の完掘状況

第１章 発掘調査に至る経緯と経過

第１節　発掘調査の経緯

開発行為に先立って、平成１６年度において実施した詳細分布調査は、５地区で実施した。まず第１の事業は、島根県益田土木建築事務所が予定している「町道内谷線石谷工区交Ｂ（代行）事業」計画のもの、そして島根県益田農林振興センターの「中山間地域総合整備事業（益美地区」、それに匹見町（現益田市）の「町道三葛線道路改良工事」に伴う、以上３事業のために、先立って実施したものである。

このうち１者の島根県益田土木建築事務所のものは、平成15年５月７日付（13益土第2182号）で事前協議の通知を受け、試掘調査は平成16年の４月中に実施したのであった。また２者の圃場整備事業に係る島根県益田農林振興センターのものは、先年から引継いで実施しているものであるが、同年10月から平成17年１月にかけて落合地区の３地点で行ったのである。そして３者の三葛線に伴う事業のものは、平成17年１月から同年２月にかけて、１地点を降雪の中で試掘調査を実施したという実状であったのである。

第２節　発掘調査の経過

さて、その経過であるが、本報告で「広戸地点」といっている「町道内谷線石谷工区交Ｂ（代行）事業」に先立ち実施した調査地では、３調査区（１調査区は２ｍ×２ｍ）とも縄文遺物が出土し、とくに縄文後期初めの中津式系のものが多量で、これに数点であったものの、阿高式土器が伴ったことは注目される出来ごとであり、文化保護にとり組んでいく必要があろうと考えている。つぎの落合地区における圃場整備事業のものは、石田・久保・平内田といった３地点を試掘した結果、平内田地点から数点の弥生後期のものや、１基の打製石斧が出土し、遺跡であるということが判り、一定の成果を得ることができたのであった。ただし、他の地点では証明するには至ってはおらず、また三葛地区における河桑田地点でも確認することができなかったのであった。

第１図　調査地点位置図

以下後章では、これらの特に遺跡であることが確認することができた「広戸」、「平内田」の２地点を中心にまとめていくことにするが、４月、そして11月から越年して２月まで要した今回の分布調査においては、作業員の皆様方には本当に降霜・降雪の中、誠にありがとうございました、と低頭する次第であります。

（渡　辺）

第２章 広戸地点

第１節　地区の環境

１．立地

調査地点は、島根県美濃郡（現益田市）匹見町石谷ロ３６８番地ほかに所在するが、本地区は通称"内谷"（うつだに）といわれており、現80余りの戸数が点在し、主に農・林業を活計とした小集落である。

調査地点の30m西側には、石谷川が棚原谷などの小谷を集めて北流し、それを挟む山やまは高位の三子山で799mを測るものの、周辺には変成岩を基盤とした400～600m余りの山地が重畳しているという立地下にある（第２図）。

また調査対象地点域は、東側から派生した山裾が石谷川に緩やかに至っているが、対岸側は急峻で可耕地もみられない。一方その石谷川の下流方向の北－南は、同様に右岸側に緩やかな山裾の派生が拡がっていて、そこには水田や民家が点在しているといった環境を呈し、調査はその１角の標高約334.6mを測る水田が対象であったのである（図版１－１）。

第２図　地点位置と周辺の遺跡図

2．周辺の遺跡

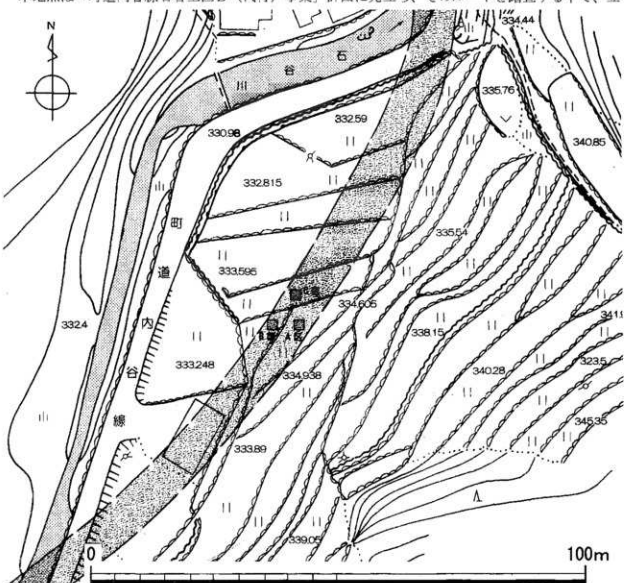
詳細な調査が行われていない、また平地や河岸段丘が発達していないという地形的立地などもあって、本地区の歴史的環境は極めて貧弱である。例えば、縄文遺跡では縄文後晩期のものと想定される土井田遺跡にみられるにすぎず、弥生遺跡は今のところ発見されていないのである。

また古墳も確認されていないが、ただ本地区との境山をなした峠付近の内石地区寄りには未発掘の田原古墳が存在している。そして、調査地点の北側200mの尾根筋には、大谷・猪俣氏が拠っていたという中世の山城である花ノ木城跡があり、そして近世のものとしては、1km下流に本地区の庄屋を務めたという猪俣家の墓地が知られているといった程度で、歴史的痕跡は極めて乏しいといった土地柄である（第2図）。

第2節　調査の概要

1．はじめに

本地点は「町道内谷線石谷工区B（代行）事業」計画に先立ち、そのルートを踏査する中で、立



第3図　調査区配置図

地上から遺跡の可能性があるのではないかと判断して選定したものであった。また、調査地点名を広戸（ひろと）としたものは本地の字名を引用したもので、その該当地は、傾斜地を利用して棚田と化された水田の１角であった。

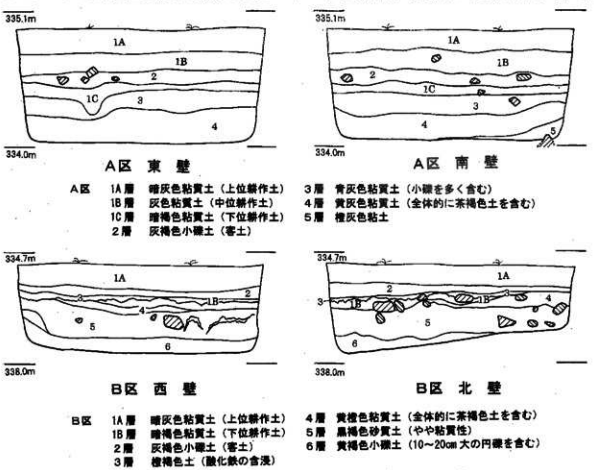
２．調査区の設定

調査区の設定については、事業計画予定地内であることを対象としたことは勿論であるが、そのうちでも石谷川が形成した河岸段丘面の面影が遺っている地形上も考慮して選定したものであった。その結果、旧河岸段丘端であったと想定された匹見町石谷ロ３６８番地ほか（第３図・図版１－１）を選定することにし、そこは３段からなる３枚の水田であって、２ｍ×２ｍの方形区を各１区ずつ任意に設けることにしたのであった。

つまりＡ区としたものは、表面標高約334.9ｍを測る上段部の水田に、２ｍ方形のものを磁北方向に設定することから始めたのである。そして、Ｂ区と称するものはＡ区から西方向に４ｍ測った、約30㎝余り低い中段めに設定したのであった。またＣ区のものは、表面標高約334.15ｍ測る下段の水田に、Ａ区から７ｍ北側に測って、さらに西側に１ｍ向かった地点にと、以上３調査区を設けたのであった（第３図・図版１－１）。

３．層序と遺物包含層

Ａ・Ｂ・Ｃの３調査区を設けて掘削したものの、いずれも層序に類似性がみられず、とくにＣ区



第４図 土 層 図

の３層においては撹乱を呈し、しかもその下位は基盤層の河床礫に至るという状況であったのである。これは水田造成などで頻度の深い削平が行われたことによると思われる。また、A区においては青灰色粘質土がみられるなど、全体的に水性の影響が強かったものと思われ、B区の層序とは異なっていたのでる（第４図）。そしてA・B区では、３層上位層において水田の再造成（マチダオシ）が行われたらしく、新旧の耕作土が重層するといった状況もみられたのであった。

さてA区の層序は、水田耕作土と思われる暗褐～灰色粘質土が３重に堆積し、２層は客土と思われる灰褐色小礫土であった。３層は青灰色粘質土で、20～30cmの層厚のものがほぼ水平に堆積していたが、遺物は皆無であった。そして黄灰色粘質土の４層は、層厚50cm前後測るものがほぼ水平に堆積し（第４図）、本層からは数点の石器剥片とともに、19点の縄文土器が出土したものである。これらの土器は突帯文土器に伴う１群で、また石器剥片の中には乳白色の黒耀石２点もみられたのである（第１表）。なお、５層は地山と思われる黄褐色小礫土で、本層からは遺物・遺構も皆無であった。

出土区	層位	石鏃	石錐	黒曜石(白)	剥 片	縄文土器	陶磁器	計
A区	1～2層				4		1	5
	4 層			2	4	12		18
	客 土					2		2
	落込遺構					1		1
B区	1～2層			6	2	21		29
	4 層	1		6	1	207		216
	5層上位			2	2	193		197
	5層下位					11		11
C区	1～2層				1	5	1	7
	3(撹乱)層	1	1			5	1	8
計		2	1	16	14	457	3	493

第１表　出土遺物集計表

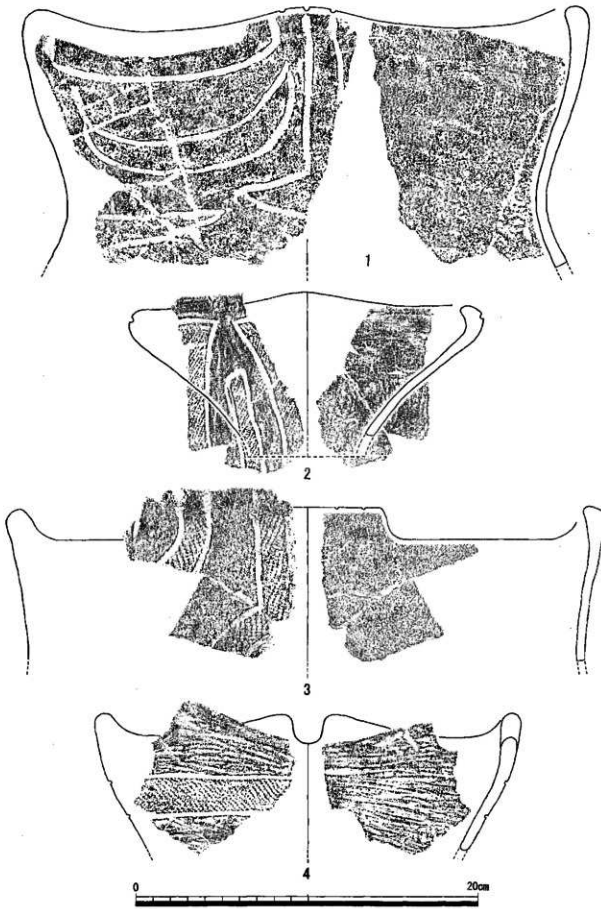
B区の上位層の耕作土も、A区と同様に２重に堆積し、再造成が行われたことが窺われた。そして客土の２層は比較的厚く推積し、その中には削平などで搬入したものと考えられる石器剥片や土器が20数点出土したのである。また上位部が深く削平されていたと思われる黄橙色粘質土の４層では、200点余りの石器剥片や土器が出土し、遺物文化層であることが判ったのである。これらの遺物を土器形式からみると、中津式のものを中心に、そして若干の福田ＫⅡ式系のものであることからみて、縄文後期前半期の文化層であったと想定したのである。また、５層は黒褐色砂質土で、層厚約40cm前後を測るもので、本層からも上位層とほぼ同じ時期の縄文遺物が出土した。（第１表・図版１－４～５）。ただし、遺構と思われるものは確認することができなかったのであった。

なお、C区の調査区においては、前述したとおり撹乱して穏当な堆積状況でなかったので、除くことにしたが、本区からは削平などで搬入したと思われる石鏃１点をはじめとして、数点の縄文遺物が出土したにすぎなかったという状況であった（第１表）。

第３節　出土遺物

１．はじめに

石器・土器などを中心とした遺物は500点近いものが出土し、中でも土器は457点の約93%を占めるといった状況であった。これからの包含層は、B区では４・５層を中心に出土しているが、A区では縄文晩期の突帯文土器が４層で捉えられた。また、石器類も土器と同様な層序で出土しているものの、極めて少量で、しかも利器といえるものも少なく、大半は石器剥片であったのである（第１表）。これらの縄文遺物の多くはB区とした調査区で出土しており、土器は中津式を中心として、



第５図　実測遺物（１）

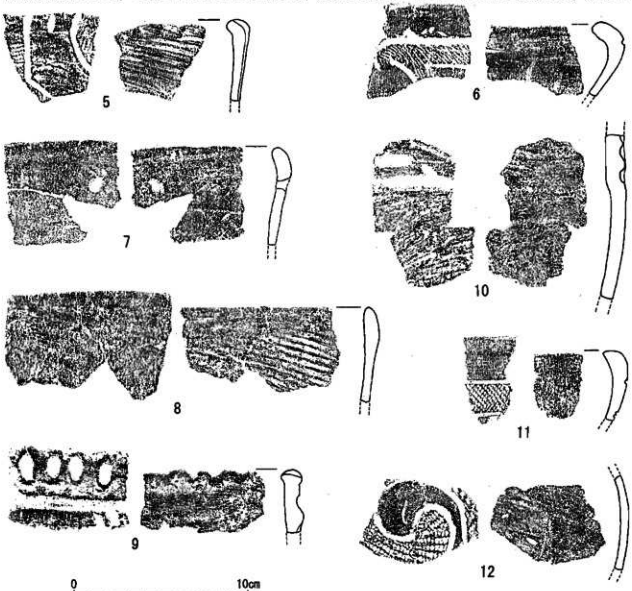
また福田KⅡ式がみられたことから、縄文後期初めに軸足をおくものの、広義的にいえば縄文後期前半期のものということができ、したがって該当地点では縄文晩期のものと、2期の文化期が存在していることが判ったのであった。そして注意すべきは、16点の乳白色の黒耀石剥片が出土したこと、それに3点の滑石を混入させた阿高式土器が共伴したということである。

次項では、これらの特徴を示していると思われるものを抽出し、以下概説していくことにする。

2．実測土器（第5図～第7図・図版2－2～3－1）

1～8は、いずれもB区に出土したもので、口縁部は乳頭状に肥厚させながら外反し、その端部は、弱く内弯するといったもので、これらは中津式に比定されるものということができる。

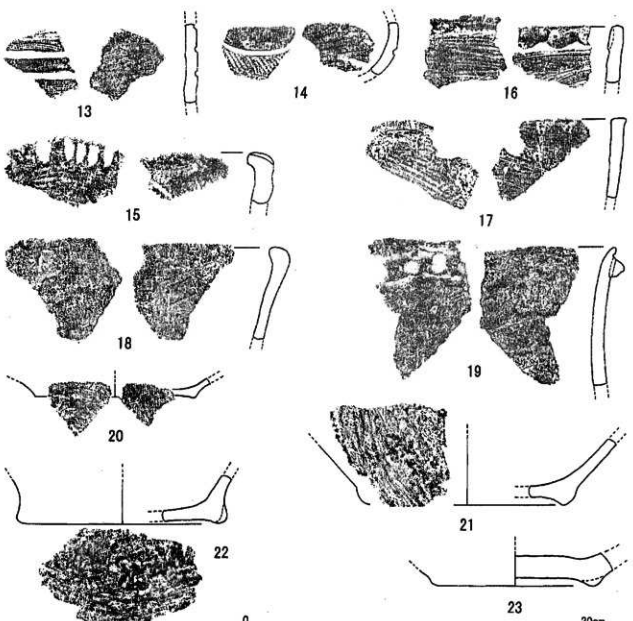
このうち1は、5層に出土した波状の口縁部である。口径約33cmを測るものと思われ、外面には太い沈線で孤・直線を描き、その末端部は三日月状を呈する。内外面とも横方向の条痕で整形した後、とくに内面は丁寧なナデで調整する。胎土には2～3㎜の砂粒含まれ、色調は橙褐色で、焼成は良好である。2も5層に出土したもので、波状の精製系の浅鉢土器と思われるもの。外面に



第6図　実測遺物（2）

は縦方向に弧・曲線ふうの沈線で区画し、その区画内を縄文と磨消しで施文する。口縁部下半の器肉は4㎜程度と薄く、とくに内面は精緻にナデ調整とする。色調は内外面とも暗褐色を呈し、焼成は極めて堅緻である。3は、突起の端部が平状を呈した粗製系の口縁部である。外面には突起に向って太い沈線でくの字状に描いて集約させ、その沈線の区画内を縄文と磨消しで区分するが、その磨消し部分は弱いために、縄文の痕跡が僅かみられる程度である。内面はケズリ調整、色調は明橙色を呈するが、外面には煤が付着し、部分的に暗褐色もみられる。

4は、山形状の突起をもつ口縁部で、外面には横方向の2本の平行沈線を描き、その区画に縄文、その区画以外の他は、内外面とも巻具の条痕で調整する。胎土には石英などの砂粒を含むが、焼成は堅緻で、色調は赤褐色を呈する。5は、3と同様の器形・施文であるが、内面は巻具調整という違いがみられ、色調は橙褐色である。6は、口縁部がC字状に内弯するもので、外面には丁字文を



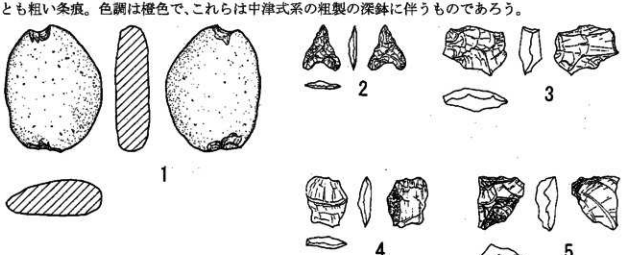
第7図　実測遺物（3）

施文し、縄文と磨消しで区画する。調整はミガキで、精製系の浅鉢である。色調は黒褐色、焼成は極めて堅緻といえるもの。7・8は、無文の深鉢系の口縁部で、うち7は内外面とも丁寧なナデで調整。8は巻貝による条痕の後、外面そして内面の口端部はナデ調整である。

9・10は、両者ともB区の5層に出土した滑石混入の阿高式土器。うち前者は平口縁で、端部に棒状具による太い刻みをつけ、その下部の外面に横走の凹線を施文する。破損部にも同様の凹線分を有していたものと思われ、また1部に凹点文もみられる。器肉は9㎜前後を測って厚く、内外面とも横ナデ調整、色調は茶褐色。そして後者は頸胴部で、外面には横方向の凹線、凹点文を施文し、胴部には斜向のケズリ、そして文様帯と内面はナデ調整とする。色調は前者と同じであることからみて、1個体のものであるかも知れない。

11は、精製系の浅鉢の口縁部で、外面には横位の幅広の縄文・磨消しで区画したもの。外面は橙褐色、内面は黒色を呈し、胎土、焼成とも堅緻。12は渦巻文を施文し、その区画内を縄文・磨消し調整としたもので、器肉は薄く、内外面とも黒褐色。13も同じく磨消縄文土器。沈線は幅広であるものの、平行区画がやや広く、縄文は貝による疑似縄文。14は、幅広の曲線で施文した精製系のもの。15は、粗製の波状口縁部で、口端部に棒状具で太めの刻みを押圧したもの。内外面とも条痕の後、ナデ調整とし、胎土には砂粒を多く含む。16は、内面側に折込み、貼付け帯とした口縁部で、指頭による圧痕がみられる。内外面とも条痕調整。17は、内外面とも巻貝による条痕調整のもので、色調は暗褐色。18は粗製系の無文土器で、条痕調整の後、外面はナデで、色調は橙褐色を呈するもの。19は、A区の4層に出土した突帯文土器で、突帯は太広で、その頂部の刻目は、指頭圧痕によるものらしく幅広である。

20～23は底部で、うち20は底径10cmを満たない精製系のものと思われ、器肉は薄い。底部の高台の中志部は穏やかな凹レンズ状をなし、内外面ともヘラミガキ調整で、色調は黒褐色。21は、内外面とも条痕調整の後、高台外面はナデ、焼成は極めて堅緻といえるもので、浅鉢系のものであろう。22・23は粗製の底部で、両者とも高台の中志部は僅かに凹状をなすといった程度で、調整は内外面とも粗い条痕。色調は橙色で、これらは中津式系の粗製の深鉢に伴うものであろう。



第8図　実測遺物（4）

3．実測石器（第８図・図版３－２）

１は、Ｂ区の４層に出土した花岡岩質の礫石錘で、両端を打欠く。器長約5.5cm、器幅約４cmで、重さ36gを量る。２は、Ｃ区に出土した石鏃。石質は安山岩で、基部を凹状に抉入した鍬形鏃である。成形は不等形をなし、剥離も粗く精緻なつくりといえるものではない。３から５は石器剥片で、うち３・４は安山岩質、５は乳白色の姫島産の黒耀石である。

今回の調査では、多量な土器の出土に比べて、石器類が６％余りと極めて少ないということもあった。これは調査区以外に存在する可能性があることを意味し、見方を変えるならば、当調査区に出土したものは"土器溜り"の状態下のものではなかったかと考えている。

（渡　辺）

第３章 平内田地点

第１節　地区の環境

１．立地

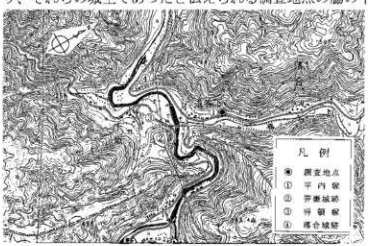
本調査地点は、島根県美濃郡（益田市）匹見町大字落合イ33－甲番地ほかに所在し、そこには隣接して周知の遺跡である平内塚がある（第１図）。

調査地点とする落合地区は、町域の北西部に位置し、南東側には春日山（989m）をはじめとする高峻な山岳が北東から南西に走り、また北西側も同様の700m内外の山地が連なるといった断層谷に存在する。そうした北東－南西方向（5.2km）に細長い地形を呈した地区内を南西流する落合川は、狭小な段丘を形成しながら、西流する本流匹見川に合流しているのである。

その相会地近くにある調査地点は、落合川が形成した右岸の河岸段丘のうちでも、山裾寄りに形成された現地標高約246.69mを測る畑地（地目水田）に立地する。そうした地点周辺は、眼前を河伝いに一般県道美都匹見線が走り、そしてそれは南西約120m地点で国道488号線と交わっているという要所にあって、その附近には自治会館や数件の民家が点在しているといった景観を呈している（第９図・図版４－１・４－２）。

２．周辺の遺跡

本地点の周辺には原始・古代遺跡みられないが、中世期のものといえば落合城跡・笄嶽城跡があり、それらの城主であったと伝えられる調査地点の脇の平内塚、そして河をへだてた千原地区の丘陵には将軍塚が分布している。



第９図　調査地点と周辺の遺跡図

また１km北東にも同族が拠城したといわれている笹山城跡が存在しているのである。いずれにしても伝承の域をでないが、本地点域は３方向に通じる重要なルート筋にあったっていることから、ある程度の勢力をもったものが、居住していたことが推察されるのである（第９図）。

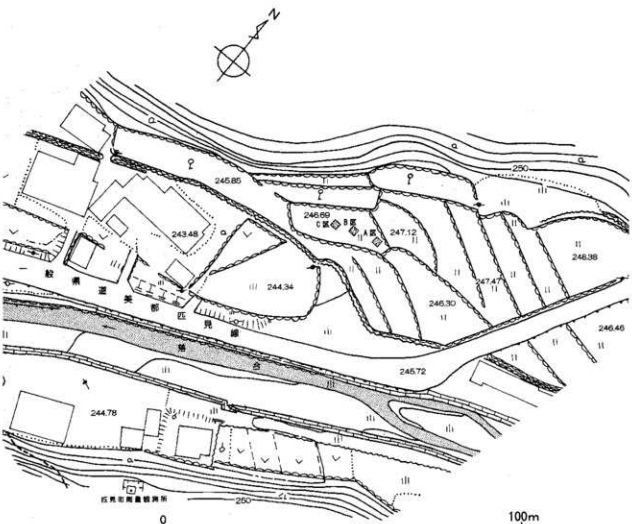
第２節　調査概要

１．はじめに

本詳細分布調査は、島根県益田農林振興センター「益美２期中山間地域総合整備事業」計画の提出に伴い、それに先立ち実施した分布（試掘）調査で、平成16年11月22日から同年12月20日にかけて現地調査を行ったものである。

２．調査区の設定

調査区の設定にあたっては、事前踏査による地形的立地、また隣接する周知の遺跡である平内塚



第10図　調査区配置図

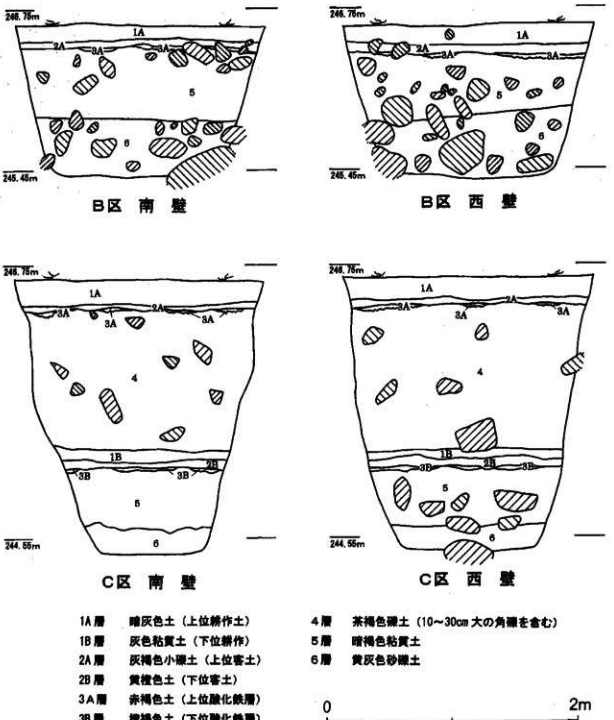
のことを加味した上で、その塚の北東側に広がるほぼ台形状を呈した1筆の水田（現畑地）に設けることにした。そしてその対象地を平内田（へいないだ）と呼称されることから、調査地点名としたのであった。

調査区は対象地に、2mの方形とするグリットを任意に3箇所ほど設け、それらを設定順位に従い、北東側の上流部からA・B・C区と呼称することにして、発掘調査を始めたのであった（第10図）。

3．層序と遺物包含層

本地域における基本的層序は、1層の暗灰色土（耕作土）、2層の灰褐色小礫土（客土）、3層の赤褐色土（酸化鉄分の含浸）、4層の茶褐色土、5層の暗褐色土、6層の黄灰色砂礫土（河床礫）の順で堆積していた（第11図）。

このうち1層の耕作土は、C区において2次的に形成された様子が窺われ、また2層（客土）・3層（酸化鉄層）でも捉えられたものであった。これは低地だったと想定される南西半部が茶褐色土（4層）で盛土され、水田の再造成（マチダオシ）されたものと考えられる（図版4－5）。一方、A区の周辺では、やや高位地であったためか、5層は尖滅あるいは欠如するといった状況から、



第11図 土 層 図

1次の水田造成時に水平を得るために深度の高い削平がなされていたことが看取されたが、しかし、そういった影響が少ないB・C区では、南西側に向かって降下する基盤層に沿って、層厚約50～60cmを測り徐じょに厚く堆積していたのである（図版4－3～4－5）。これらのうち1～4層には削平・埋立てによって、その時に搬入されたと思われる陶磁器片など数点が採集された。そしてB区の本層からは、中世・古墳・弥生・縄文期の遺物10数点が認められたものの、遺構は認められなかったのであった。つぎの黄灰色砂礫土は、20～40cm大の円礫がみられ、実質的には基盤層と思われたので、下位への掘削は中止したのであった。

以上のことから本地点の遺物包含層は、上位層の人為的堆積の近世期のものは除いて、４期の時期差があるものが同一層内で複合することになるが、これは削平の影響、そして逆転などの撹乱によって、該当期の原行通りのものを把握できたとはいえる状況のものではなかったのである。

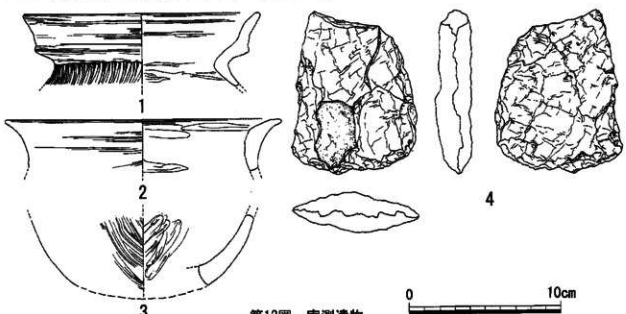
第３節　出土遺物

１．はじめに

本地点のC区では、１～４層までの後世の人為層といえる層序を中心に、近世期の４点の陶磁器片が採集されたのである。そしてB区の５層からは、１点の中世期の土師質土器片、古墳期の土師器片６点、そして４点の弥生土器片、縄文期の打製石斧の１点が出土したのであった（図版４－６・５－１・５－２）。これらのうち実測したものは、すべてB区の5層から出土したものであり、以下、特徴的なものを数点取り上げ、若干の説明をしておきたい（第12図・図版５－３）。

２．実測遺物

１は、弥生土器の甕。強く反転して立ち上がる複合口縁で、口端は円く、外面の頸部には櫛描文を斜向に描く。また内面はナデ調整とし、胎土は緻密で、色調は黄褐色を呈する。器形等からみて、おそらく後期後半に位置付けられるものと思われる。



第12図　実測遺物

２・３は、土師器。うち、前者は橙褐色を呈する口縁部で、口縁部は短く外反する。そして口端はヘラ状のもので成形後、精緻なナデで調整する。こうした傾向からみて、古墳期のものと考えられる。そして後者の低部は、外面はナデ、内面ヘラケズリとしたもので、胎土には３㎜大の砂粒を含んでいる。調整・色調などからみて、前者と１個体のものではなかったかと思われる。３は、欠損した凝灰岩質の打製石斧で、側縁から数打の粗い打撃で成形したもので、背面の1部に自然面が遺る。なお、この石器に共伴する土器などは認められなかったが、調査区外には縄文文化の遺物が存在している可能性があろう。

（栗　田）

第４章　そのほかの調査地点
― 遺跡と認められなかった調査地点 ―

第１節　石田地点

○調査理由

「益美２期中山間地域総合整備事業」の計画に先立ち実施したもの。

○調査地点位置

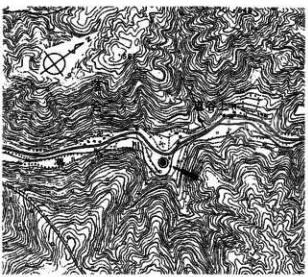
島根県益田市匹見町落合イ134番地ほかに所在（第13図・図版６－１）。

○調査地点名

石田

○調査面積

２ｍの方形区　３箇所



第13図　地点位置図（石田地点）

○立地

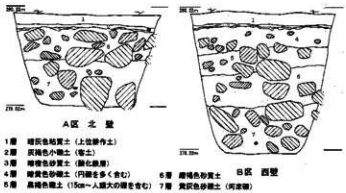
地点域を南西流する落合川が形成した右岸の段丘地。水田の可耕地。

○層序状況

１層の暗褐色粘質土（上位耕作土）、２層の灰褐色小礫土、3層の暗橙色砂質土（酸化鉄層）、４層の暗黄色砂礫土（撹乱層）、５層の黒褐色礫土（下位耕作土）、6層の暗褐色砂質土、7層の黄灰色砂礫土（河床礫層）の順で堆積（第14図・図版６－２～６－４）。

○出土遺物の有無

１～２層から近世期の陶磁器片数10点。搬入土の４層からは陶磁器片数10点採集。



第14図　土　層　図（石田地点）

第２節　久保田地点

○調査理由

「益美２期中山間地域総合整備事業」の計画に先立ち実施したもの。

○調査地点位置

島根県益田市匹見町落合ハ214番地ほかに所在（第15図・図版６－５）。

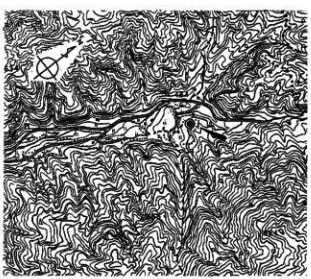
○調査地点名

久保田

○調査面積

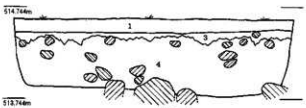
２ｍの方形区　　３箇所

２ｍ×３ｍの長方形区　１箇所

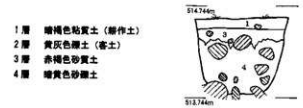


第15図　地点位置図（久保田地点）

○立地
落合川によって形成された左岸の河岸段丘地。水田の可耕地。
○層序状況
1A層の暗褐色粘質土（上位耕作土）、1B層の暗褐色粘質土（下位耕作土）、2層の灰褐色小礫土、3層の赤褐色土（酸化鉄層）、4層の黒褐色粘質土、5層の黄褐色土、6層の暗灰色砂礫土の順で堆積（図版6－6・7－1・7－2）。
○出土遺物の有無
1～2層から近世以降の陶磁器片数点のみ。



A区　北東壁



A区　南東壁

第17図　土　層　図（河森田地点）

第３節　河森田地点

○調査理由
「町道三葛線道路改良工事」に伴い、実施したもの。
○調査地点位置
島根県益田市匹見町紙祖ロ194-2番地ほか（第16図・図版7－3・7－4）。
○調査地点名
河森田
○調査面積
１ｍ×３ｍの長方形区　２箇所
○立地
紙祖川の右岸の河岸段丘。西側は水田の可耕地。

第16図　地点位置図（河森田地点）

○層序状況
１層の暗褐色粘質土（耕作土）、２層の黄灰色小礫土（客土）、３層の赤褐色砂質土（酸化鉄層）４層の暗黄色砂礫土（河床礫層）の順で堆積（第17図・図版7－5・7－6）。

○出土遺物の有無
皆無。

1．北東側からみた調査地点近景

2．A調査区の堆積状況（南・東壁）

3．B調査区の堆積状況（西壁）

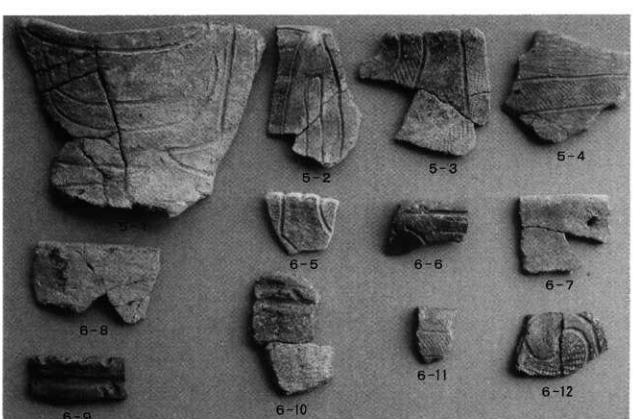
4．縄文土器片の出土状況

5．黒曜石片の出土状況

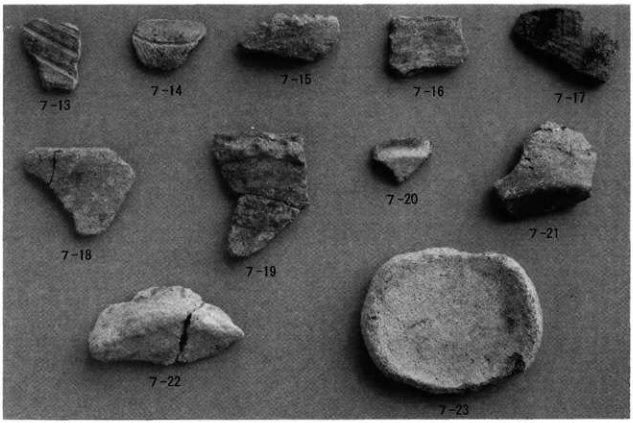
6．南からみた各調査区の完堀状況

図版２　広戸地点

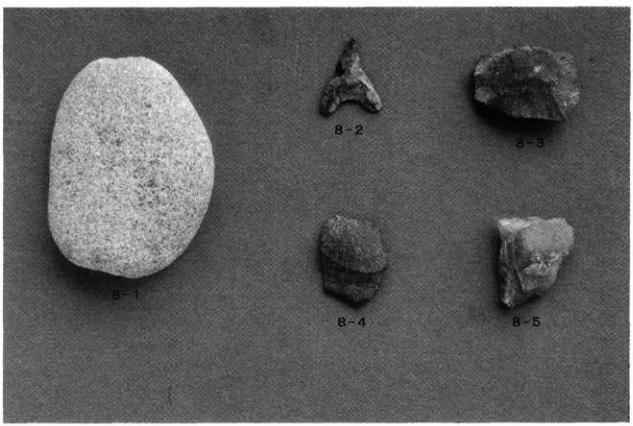
１．縄文土器の出土状況



２．出土土器（１）



1．出土土器（2）



2．出土石器

図版４　平内田地点

１．南からみた調査地点遠景

２．南からみた調査地点近景

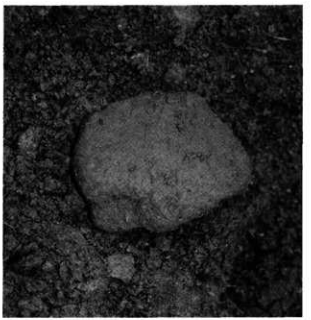
３．Ａ調査区の堆積状況（南壁）

４．Ｂ調査区の堆積状況（南壁）

５．Ｃ調査区の堆積状況（南壁）

６．打製石斧の出状況

１．弥生土器の出土状況



２．土師器の出土状況

３．出　土　遺　物

図版6　石田・久保田地点

1．県道からみた石田地点

2．A調査区の堆積状況（北壁）

3．B調査区の堆積状況（北壁）

4．C調査区の堆積状況（西壁）

5．南側からみた久保田地点遠景

6．A調査区の堆積状況（北壁）

１．Ｂ調査区の堆積状況（南・西壁）

２．Ｃ調査区の堆積状況（北壁）

３．南東側からみた河森田地点近景

４．発　掘　風　景

５．東からみたＡ調査区の完堀状況

６．東からみたＢ調査区の完堀状況

平成１７年３月２２日　印刷
平成１７年３月３１日　発行

益田市匹見埋蔵文化財調査報告第47集

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書ⅩⅦ

発行　益田市教育委員会
島根県益田市常盤町１番１号

印刷　西村印刷所